
特に意味が存在しない小説（神殺し）

あれだよなぁー厨二病？

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

特に意味が存在しない小説（神殺し）

【Nコード】

N1179X

【作者名】

あれだよねえー廚二病？

【あらすじ】

作者の処女作で御座います。

まだ、若輩でありますので文法及び知識が皆無であります。

暖かくそして、生温く見持ってください。

カンピオーネ最強モノ ハーレムじゃあないよ よう分からない作品

プロローグ？（前書き）

処女作です。

物語の構図が未だに出来上がっていないので、投稿もあやふやになるでしょう。

作者は血潮が砂、心が硝子で出来ております。この小説を読み不快になったのなら何も言わず戻るを言うただければいいかと？あれ？文おかしくない？

プロローグ？

特に意味が存在していない小説（神殺し）

注意書き

「ええこの小説は、特に意味合いがありません。特に作者自身の作風や文学の知識が皆無な為、更新速度が圧倒的に遅く、なにこおれ？と言うような物語展開。うわぁ……と引く様な小説であります。タイトル通りの訳で御座います。お嫌いな方はどうぞ戻るを選択していただければと、想います。」

第零話・プロローグ

？

この世界は、虚言で満ち溢れている。

その事実気づくまで、人はどれだけの人生を過ごすだろうか？

例えば、言葉。

例えば、伝説。

例えば、歴史。

例えば、真意。

そこら中に拡がった虚言という波は世界を巨大津波の様に人々の心を巻き倒し、飲み込んだ。永遠、無窮と反した者達が、世界の有相無相に辿り着ける可能性こそ《無限の可能性》を挙げなければ保証など出来ない。

？当たり前？な事に気づいた私は、既に人知を越えていた。

気づいたら、生きていた。

気づいたら、生まれていた。

気づいたら、言葉を発していた。

気づいたら、身体を動かしていた。

気づいたら、世界が合つて。

気づいたら、此処に居て。

気づいたら、其処に在った。

言葉の本質を．．．．．。

人間の存在を．．．．．。

世界の有様を．．．．．。

真実と意味を．．．．．。

神様と悪魔を．．．．．。

人が言つ？全て？知徳し、？総て？を経験し、？凡て？へと至り

私には、何も見えなくなつた。

プロローグ？（後書き）

作者は心が硝子で出来ております。赤ちゃんの泣き声で粉々に分子レベルの消滅を招きかねません。

嫌いな方は黙って戻るを選択してください。

原作も未だ未読で神話の知識も皆無。

あれえゝ詰んでね？

七人目のカンピオーネ（前書き）

だいぶ遅れました。

殺害する神は最初から決まっていたんですが、その能力とこれからのストーリーを組み立てるのにかなり時間を用いてしまった！

知識も曖昧ですしね……………

かなりオリジナルがあり、ちょっとあやふやな所があるでしょうが、これから編集していきます。

Dies iraeやFateに西尾維新。

能力だけクロスするかもしれませんね。圧倒的な勉強不足ですが……………

本当にこんなんで、大丈夫かあ……………？

誤字、または感想や言葉の間違えなど御指摘があれば光栄です。

あつ、でも作者は心が硝子で出来ております。追いつめる様な発言だけはしないでね？

七人目のカンピオーネ

？

【十九世紀イタリアの魔術師、アルベルト・リガノの著書『魔王』より抜粋】

……この恐るべき偉業を成し遂げた彼らに、私は『カンピオーネ』の称号を与えたい。

読者諸賢の中には、この呼称を大仰なモノだと眉を顰める方が居るかもしれない。あるいは、私の記録を誇張したモノだと見なす方をもいるかもしれない。

だが、重ねて強調させて戴く。

カンピオーネは覇者である。

天上の神々を殺戮し、神を神たらしめる至高の力を奪い取るが故に。

カンピオーネは王者である。

神より篡奪した権能を振りかざし、地上の何人からも支配され得ないが故に。

カンピオーネは魔王である。

地上に生きるすべての人類が、彼らに抗う程の力を所持出来ないが故に。

【二〇世紀初頭、枢機卿アントニオ・テベスが教皇庁に宛てた書簡より抜粋】

神に背を向け、悪魔の知識を玩ぶ魔導師共に『王』と崇められる存在がごいます。

おそらく、皆様も彼奴らの称号を一度は耳にした事がお有りです。

よう。

カンピオーネ。エピオメテウスの落とし子。魔王。

極めて遺憾ながら、この者達に抗う術を我ら人類は持ち得ません。彼奴らと互角に戦い得るのは、同等のカンピオーネか父なる神に仕える天使達、または忌まわしき異教の神々だけなのです……

【二十一世紀初頭新たに報告されたカンピオーネについての報告書から抜粋】

ギリシアの神、ヘルメスは数多の属性に数多の名を持つ神です。オリュンポス神族の伝令訳であり、伝承では天空の神ゼウスに主従し多くの密命を果たしています。代表的には百眼の巨人アルゴスの殺害で、アルゴス殺しの異名を得ています。

また、羽の付いた旅行帽に黄金の翼を持つサンダルタリア。そして、メドゥーサの首を切り落としたとされる両刃の刀ハルペーを持っています。特徴と言えば商業の象徴とされているケリュウケイオン（カドウケス）と呼ばれる双頭の白蛇が絡みつく杖が有名です。後に、北米神話のオーディン。エジプト神話のトート。ローマ神話のメルクリウス。そして、ヘルメス・トリスメギストスという神祕思想の祖たる神。

すなわち———？魔術？の王。

光沢鷲（偽名、本名不明）とは、この？魔術？の王を殺害しカンピオーネと成った少年なのです。

【グリニッジ賢人議会より作成された、光沢鷲についての調査書より抜粋】

既に述べた通り、光沢鷲がヘルメースから篡奪した権能、『無導の書（Guiding document for no）』は、本人曰く、「使ったら最後、地球すべてを永劫死の星と化す」という物騒な発言をし、その能力も一つを除けば一切不明です。

その能力とは、？自己の渴望を具現化する？という能力であると示唆されます。

また、先達のカンピオーネたちが所有する様な絶対的権威を獲得するには至っていない。

しかし、彼の力は権能だけではありません。

我等が派遣した調査員の報告書には「槍を投げたら海を割った」、「走ったら光速を越えていた」、「素の拳で街を荒地に変えた」、「あれ？なんでだろうこんなに気持ちいいのは始めてだな？」、「今日が世界の終わりですね。はい。分かります」、「ああ・・・」・空が青いなあ・・・」、「俺、帰ったら結婚するんだ」等、多少信じられがたい表現がありましようが、それらすべてが彼の自力なのです。

尚、光沢鷲は既に数柱の神々を殺害し新たな権能を持ち得ている様子です。

彼は、人に縛られる事を忌み嫌います、それ故に彼は今も世界中を翻弄しているでしょう。

光沢鷲が新たななる、人類の守護者となる事を望む。

七人目のカンピオーネ（後書き）

ああ．．．．．精神が重いよ。

ボーツとしながら小説を書いたら意味が分からなかった。

護堂が8人目で内の者が七人目

今から始まる物語（前書き）

究極絶後のクオリティーの低さっ！

この小説どんどん、編集していくと思いますんで。

今から始まる物語

？

時間が過ぎる事は、誰にとっても当たり前であって歳を取るに連れて体感する時間が、短時間になるのは当然の事。

すべてには平等に無意味で、無価値な物だ。

両親からはそう教わった。

彼女、さきはなあかね崎花茜はそんな到底？普通？じゃない家庭で育った。

神秘、オカルト、魔術、呪い、そんな超常的な日常こそ彼女の毎日だった故に、そういった特別な事は慣れているといっても断言してもいい。それに彼女自身がそれを用いて、あやし妖など、空想と幻想の狭間を往き来している化け物と闘う一族に生まれた。

だが、そんな彼女を持つてしてもこの空間は？異常？と言える物だった。

「うあ……………」

只今絶対ドン引き中。

その光景を見た彼女の現状を一言で表すならそうでしかないだろう。

夜の7時。

この時間帯は人があまり通らない。だが通学路としては家に帰る時の一番の近道であり、車もあまり通らない道。

そんな元から普通じゃない日常に突如として現れた超常。人が倒れている《…………》。

それも一人じゃない。10、20、30？一目で分かるのはそれだけの人が所々、血だらけで倒れている、という事だけだ。

「何……………？これ……………」

驚愕、絶句、恐怖。

妖怪に襲われたのか？それとも通り魔？それとも、喧嘩か？確かに所々不良っぽい格好の人たちがいるが、いやいや！取り敢えず倒れている人たちの治療をしなければ・・・！！

焦って冷静さを失ってはいけない。だが、それよりもこの人たちの無事を！

「案ずる事はないよ。彼らは皆、無事だ」

不意に、そんな声が後から聞こえた。

雲一つない暗闇につつまれる夜空は、月明かりを照らし出していた。

何・・・・・・？、と振り向いた彼女はその声の当人を見つけた。

細身だが筋肉質の体つき。すらっとしたモデルスタイルに、凛々しく、整っている顔つきに、女子の中でも平均より大きい茜より少し大きい背丈。

頭が良さそうで、さぞ人気があるだろう。

だがその、ルックスすべてを台無しにする不気味なニヒルな笑み。それは、もう悪人面だった。今想えばなんであの時逃げておかなかったのだろう？と後に茜は語る。

妙に、胡散臭く、感情が読み取れないが、良くそれが似合っていた。

後に彼は面白そうだから話しかけてみた、と後に語った。

その日、世界が始まったのだというなら、始まったというだろう。その日、世界が終わったというのなら、終わったというだろう。

そんな、そんな出会いだった。

「夢い月夜の下で今晚わ。どうも、お嬢さん？」

「こ、こんばんわ・・・・・・・・・・？」

さきはなあかね こうたくさぎ
崎花茜と光沢鷺。邂逅。

アンケート

初めまして？になるのかどうかは分かりませんが、ゆとり兼中二病兼自己中の作者で御座います。

今この小説の設定を組み立てているのですが、二つの選択肢で悩まされております。

草薙護堂と幼馴染にするか否か、万里谷祐理と清秋院恵那の兄貴的存在にするか否か。

本来は、私が考えなければいけない案なのですが、どうしてもそれで二週間悩みこんでしまい読者の皆様に託す事と成りました。

また、私は未熟故に表現の仕方や、誤字などが沢山あると想われます。

本文を読んでいて「あれ？ この文字なあに？」や「え？ 此処なんでそういう書き方するかなあゝ」や「うわあゝ。まったく意味分らない」など不満がありました指摘していただければありがたいです。

選択肢

？草薙護堂の幼馴染み

？万里谷祐理、清秋院恵那の兄貴的存在？

？そんな事自分で考えろお！ だからアナタはバカなのよ

？この小説を見なかったことにして他の小説を読む

アンケート結果待ってます！！！！

以下、文字数稼ぎ

それは休日の時の出来事であつた。

「今、俺暇だから遊びに來い」

僕事波前名名偽（仮名）《はまえなイメギ》は幼馴染みであり親友であり悪友である神神神神（仮名）《しんかわシンカミ》からの唐突の電話を出た最初のあまりにも傲慢な台詞にこう返答した。

「断固拒否する」

「拒否するのを拒否する、おい貴様。お前に権利があると想っているのか？」

そりゃああるでしょうよ。純粹で健全な男子高校生たる僕にもそれぐらいの権利はあるでしょうよ。

「一割ぐらいはあるでしょうに……」

「はっ」

そう、言つとシンカミは僕を完全にあざ笑う様に鼻で笑い、僕にこう言つた。

「お前に権利はない。そうだ一割も、何故ならばお前はゆとりで廚二病だからだッ……」

その台詞に僕はこう言い返した

「その口調とその台詞。そういう君こそ廚二病だ」
続けて

「残念だつたな、シンカミ。僕は廚二病じゃあない」
深く、息を吸い込む。

そして、力強く僕はこういつた。

「僕は邪気眼使いだッ……」

「駄目じゃあねえかッ……」

そんなこんなで言いつつ僕も暇であつた為神神の誘いを断る必要などなく誘いに乗り自転車で彼の家に行ったのだった。

「よお、百億六千六百五十年ぶり。イメギ」

「そうだね。僕の感覚では百十億九千八百五十六年ぶりだった気がするけど」

そんなボケにボケで返す。それでも一樣二歳からの付き合いだ。僕、イメギと彼、シンカミの関係は親友などといえる関係では無い。お互いがお互いを「面倒な奴」と想っているのだ。しかも馬が合わない。

だがそれでも彼と居ると「暇潰し」にはなる。

退屈だから彼と遊び、暇だから彼と遊ぶ。それ以外の時はお互いの事を一切頭の片隅に置いて。

そんな、奇妙でかならず縁があるシンカミと僕の関係は幼馴染みや悪友そして親友などでは言い表せない。

「いやいや六千無量大数だろう」

「いやいやいやいや、九千九百九十九無量大数だよシンカミ」

「なら九千九百九十九涅槃寂静だろうイメギ」

「・・・・・・それは無いわぁー」

「黙ってる」

あまりにも、不毛過ぎる会話を一体うち切って丁度昼に近い為とりあえず腹を満たそうという考えに移った僕達は自転車で近くのファミリーストランへと急行するのだった

ドリンクバーを知っているだろうか？

そう。自由に飲めるファミリーストランでは必ずと言って良いほど置いてあるあれだ。

僕事、イメギとシンカミは其処でとんでもないものを作ってしまった。

「おい・・・・・・どうするんだ？」

「そんなの・・・・・・こっちが訊きたいよ。どうする？」

目前にあるのは、飲み物というにはあまりにも悲惨すぎる泥の様な色をした液体。

ドリンクバーすべての飲みものを、魔女が竈を掻き混ぜる様にそれらを調合、最後にタバスコを入れた暗黒物質ダークマター

それを前に僕は立ちつくす事しか出来なかった。

「出来心ってのは怖いな。こんなものをつくってしまっなんて・・・」

「そうだね・・・」

その日、夕日は燃える様に紅かった。

余談だが、暗黒物質はおいしかった。気絶するぐらいに・・・

・

アンケート（後書き）

上記にかかれた事はすべてが実話です。

ああ、気絶はしてませんよ。

辛い、苦い、臭い、痛い、苦しい、という感覚が一気に襲ってくる
暗黒物質どうぞ作ってみてください！（おいまてやめろ）ww

アンケート待ってます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1179x/>

特に意味が存在しない小説（神殺し）

2011年10月19日03時11分発行